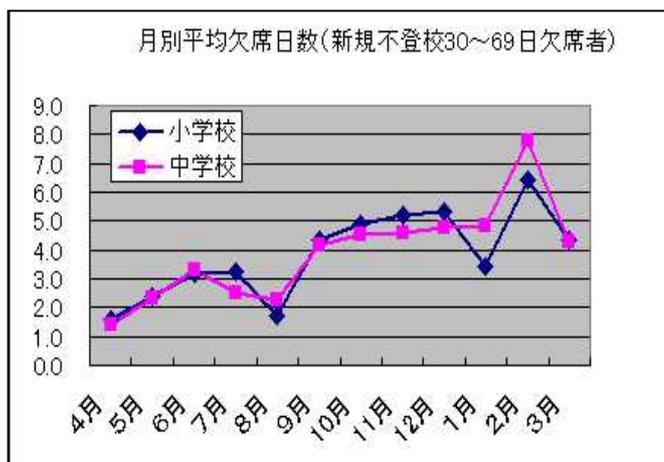
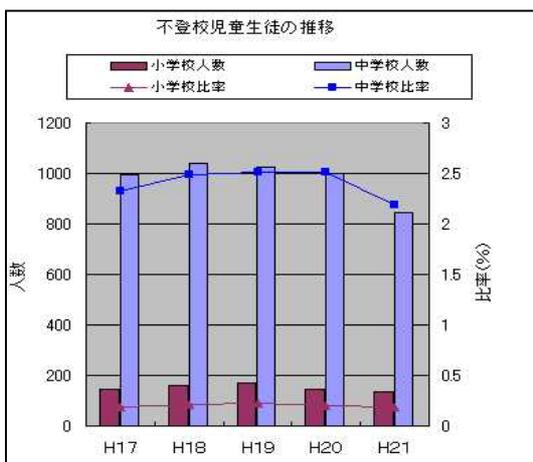


不登校対策：「月3日・連続3日の欠席」への初期対応

平成21年度の問題行動等調査の結果、岩手県の小・中学校の不登校児童生徒数は984人(前年度1,144人)で、人数・比率ともに減少しました。欠席日数別に集計した結果、小学校の約48%、中学校の約36%が「年間30日～69日」の欠席者でした。平成21年度に新たに不登校になった児童生徒で、この「30日～69日」の欠席者の月別平均欠席日数を見ると、1学期は2～3日前後、2学期は4日前後で推移しています。不登校対策の一つとして、「月3日・連続3日の欠席」への初期対応があげられます。



初期対応のチェックリスト

健康面

体調不良での遅刻、欠席が多くなってきた。
理由は問わず、月3日以上欠席があった。
保健室に行くことが多くなった。
給食の量が著しく減少または増加した。

学習面

学習意欲が低下している。
特定科目のある日に欠席・欠課が繰り返される。

人間関係

友だちと離れ、一人でいることが多くなってきた。
登校しても教室以外で過ごすことが多くなってきた。
友だちからかわれたり、仲間はずれにされたりしている様子が見られる。

2学期の不登校対策

担任の先生にとって自分のクラスの児童・生徒が欠席をすることは、心配な気持ちと「このまま不登校になるのでは…」という不安や焦りにも似た気持ちに襲われることにつながるかもしれません。特に、これまで全く欠席をしたことのない児童生徒が連続して欠席した場合はなおさらです。しかし、児童生徒にとっても「休まなければならないくらい切羽詰まっている」という心理状態であることが推測されます。頭痛、腹痛、吐き気などの症状が出ている場合は、言葉にできない苦しさや身体に出ていると考えることもできます。

このような時、先生だけでなく保護者の方も不安や焦る気持ちに支配されやすくなります。皆が不安で一杯の時だからこそ、初期の焦らず無理強いをしない対応が、結果的には予後に良い影響を与えます。例えば家庭訪問を行う際には、本人の顔を見に行く、本人に会えなければ保護者とお会いする、こちらの心配している気持ちや待っていることを伝える、困っていることはいつでも相談に乗ることを伝える(直接、間接的に)の3点を中心にとすると、本人、保護者、教師の信頼関係の構築に繋がり今後の支援の土台が形成されると思います。

スクールカウンセラー 久保 香世